

序

今、本書を手にとってくださった皆さまは、理学療法、リハビリテーション医療、コンディショニング、スポーツ指導などの分野において、対象者の「運動機能障害」と真摯に向き合っている専門職の方々であろうと思います。もしくは、理学療法の学部教育や臨床実習などで「運動機能障害」をより深く理解したいと思っている学生かもしれません。昨今、このような分野において数多くの専門書があるなか、本書に目を通して頂き感謝いたします。

対象者への評価・指導の意思決定や実践では、科学的根拠・エビデンスが最も重要であることは言うまでもありません。一方で、皆さんご存じのように、実際の現場では、エビデンスさえ把握していれば運動機能障害を解決できるかというところ簡単ではありません。例えば、変形後股関節症患者さんの股関節痛にはエクササイズの効果があるとするメタアナリシスやこれに基づくガイドラインがあったとしましょう。これらの元になっている無作為化比較試験の論文を読むと、関節可動域エクササイズなどにおける肢位、対象関節・筋、運動方向、頻度などが見つかると思います。しかし、エクササイズと姿勢・動作における運動連鎖との関係性までは不明でしょう。また、代償運動のコントロールやエクササイズによる二次的な問題までは論文をいくら読んでも不明のままかと思います。

リハビリテーション医療などの現場でリスクを管理しながら介入効果をあげるには、エビデンスとともに、経験により蓄積されたクリニカルパターンやこれに基づくアプローチ法が求められ、これらのバランスがとても重要になるのです。

本書では、臨床で出会うことの多い運動器・スポーツ疾患に焦点をあて、運動機能障害の評価から治療までを実践できるよう解説しました。特筆すべきは、下記となります。

- ・運動機能障害における結果と原因の両方へのアプローチに不可欠な、運動のつながりや、運動力学的連鎖の視点を重視
- ・多くの図表やカラー写真
- ・理解しやすい「箇条書きの解説」
- ・試行的治療で即時効果を判定し、計画を立て、修正していくリーズニングプロセスを明示
- ・スクリーニング・評価および指導・治療を病期に分けて解説
- ・悩みどころ「エクササイズの負荷調整」のポイントを明示
- ・臨床での豊富な経験はもちろん、研究・教育にも取り組むエキスパートによる執筆

運動器、機能障害、理学療法に関する書籍は多くありますが、本書には、皆様、ひいては患者さんにとって価値ある情報があると自負しております。明日からの現場実践や教育に活かしていただけると幸いです。最後に、企画から発刊まで様々な提案やコーディネートをしていただいた羊土社の鈴木様、横内様に感謝を申し上げます。

2021年3月

相澤純也，大路駿介